

我々は何を研究すべきか

— 一つのやり方 —

西 田 美 昭

私は研究生活をはじめようやく1年になろうとする時にある。したがって私にできることは、何故に研究——具体的には歴史学——を志したか、そしてそこで何をしようとしているかという筋道を告白することだけである。

私の研究意欲は結論的にいえば、学生運動——具体的には安保闘争およびそれに続く帰郷運動——の中で養われた。特に帰郷運動の中で、「農家のほとんどは、署名しないばかりか、せせら笑いさえて取り合わない事実、茶の間や田んぼのあぜ道でも、安保に反対する意見はなぶりものにされがちな」事実の前に我々は大きく動揺した。何故に彼らは保守的であるのか、客観的に見て、どうしても彼らの置かれた条件は安保に賛成していられる程楽なものではないのにどうして我々は冷たくあしらわれたか。この疑問は、当然、何故に彼らは自民党の地盤たりえているのか、という疑問でもある。

これが先ず「農業問題」に関心を持ったきっかけである。農業の現状をみると、零細農耕制を基盤とする小土地所有が基調である。これは、明治維新・農地改革という二大変革を通して揚棄されなかった。例えば、私の学部のとときのフィールドであった神奈川県をとれば、昭和31年段階で、一戸当耕地平均は6反7畝、1町5反以下層が94.5%を占める状態である。それ故農業生産性の向上は限られ、農工間の格差は増大する一方であるというのが事実なの

であるが、小土地所有者意識にもとづき、その零細地片にかじりつき、小農生産からの脱却の道を自ら断っているということはよく指摘される事実である。

ここで私の進めるべき研究の方向は二つあった。一つは、このような零細農耕制——小土地分散所有はどのように揚棄されなかったかを追求する方向、もう一つは、如何にして現在ある零細農耕の矛盾を解決するかを追求する方向である。卒論を書く段階では、性急な私は第二の方向、すなわちどうすれば農業はそれ自体として生きられるかという分析により多くの関心を持った。

かくて私は農業の生きる道を求めて卒論に「農業共同化論」を取り上げた。すなわち農業共同化による小農生産否定の追求である。しかし、私が期待して見守っていたいくつかの共同化の事例は、ごく例外——新利根のような開拓地における共同化、等——を除いてことごとく失敗に帰したという事実の前に、共同化による私の期待は破られた。共同化をものはむ日本の零細農耕——小土地分散所有の本質は何か。

ともかく失敗の原因を要約すると次の三つになる。第一には、共同化されても耕地形状は依然零細錯圃形態であり、生産力の画期的上昇をもたらさないこと。第二には、第一のことと密接に関連するが、土地の私有権の主張により、階層較差がそのま

ま共同体内部に持ちこまれ、分解を起こすこと、第三には、独占資本から生産手段購入と生産物販売の両面を通して二重の搾取を受け、生産力の向上による剰余部分を農民に残さないこと、である。ここに至って私の研究方向は明確になる。すなわち日本の農民は、何故に零細農耕を基調とする小農でなければならなかったか、世界史的な段階で大農場制の優位が証明されている現在何故に小農にとどまらざるをえないか、という第一の方向の分析に向かう事を共同化の分析は要求していると考えられるからである。

現在私の研究は、大正期における小農生産のメカニズムを明らかにすべくすすめられている。なぜ分析を大正期に求めたかは次により明らかであろう。

現在、先にあげた問題「日本の農民は、何故に零細農耕を基調とする小農でなければならなかったか」に研究史は、どのような形で答えているだろうか。第一にあげなければならないのは、農政の側からの提言である。すなわち農業基本法を骨子としての構造改善事業推進論である。これは零細農耕が農業問題のガンであるということ認識し、これをある程度解消することにより、農工間の較差をうめていこうとする立場である。しかしこれは共同化失敗の第一の原因を極めて不徹底な形——適正規模二町程度という——で解決しようとしたものに過ぎず、第二、第三の原因は全くかえりみられておらず、理論的見通しが極めてあいまいである。

第二は、二重構造論であろう。これは独占資本を頂点とする工業と農業の較差を問題にし、この二重構造が存在する限り農業は展望を打ちえないとするものである。しかしこの論は二重構造の存在は証明したが、何故に二重構造が存在するかは説明されていない。すなわち二重構造のメカニズムは、もっぱら工業部面の資本の動きのみから説明され、何故に零細農耕を基調とする農民が、二重構造の底辺を形成しなければならなかったかを零細農耕制のメカニズムから説明するという分析はない。

第三は地主制論であろう。これは戦前日本の農民は、地主制のもとに圧迫され、これが日本の農民を小農段階におしとどめたという意識にもとづきなされたものであるが、大正期以後の地主制の後退、更には、農地改革での徹底的解体があったにもかかわらず、なお農業部面では小農段階であるという事実は、この視点、特に地主制形成過程の問題の究明のみでは不十分であることを端的に示している。

第四は、第三の論と共通の意識で、小農形成の原型を追求することにより、零細農耕を基調とする小農生産のメカニズムを明らかにしようとするものである。これは原型追求という視点からして当然に、明治維新、あるいは更に、江戸時代へと分析が溯り、むしろ封建制の基礎構造を明らかにするという面でも多くの成果をあげている。

以上私のかかえた問題に即して四つの型に整理したのであるが、いずれも私が先に提出した問題に十分な答を用意していないことは明らかである。しかし、にもかかわらずこれらの研究史は、私がこれから何を研究すべきかを示唆する多くのものを含んでいる。すなわち、二重構造論が特徴的に問題にしはじめるのは大正期であること、そして地主制の後退がはっきりし、農民運動も本格化し、農政も小作立法の展開という形で転換せざるをえなくなったのは大正・昭和初期であることは、多くの研究が実証するところである。その他、ロシア革命、第一次世界大戦、米騒動・労働運動・農民運動・護憲運動の高揚、大正9年、昭和4年の大恐慌、等のメルクマールをとってみればわかるように、この時期が、日本の全構造を大転換させる時期であることは容易に察せられる。

今までこの時期の分析が、全くといっていい程欠けていることは、むしろ不思議である。したがって私の研究は当然時期はこの大正・昭和初期に向けられ、この激動期の中で、何故に、直接生産過程が基本的に零細農耕を基調とする小農段階にとどまらざ

るをえなかったかを追求することになる。

具体的には、小農生産の基礎である、労働力と生産手段の結合の場である経営内容の検討から始めるわけであるが、現在は特に労働力の存在形態を中心に、大地主地帯である新潟を中心に分析を進めている。

もちろん私の分析視角、方法が無意味になる事態が起る、あるいは、より重大な問題が起こるかもしれない。その時は、自分の研究の成果、諸先学の成果なりを足場に新しい問題に取組むつもりである。そういう時のためにも自分の研究のすじ道を常に明らかにしておくことは、大切であると考えられる。

（附論）「学問」と「現実」の問題提起について

以上で私の研究への構えを告白したわけであるが、ここで「学問」と「現実」実行委員会より提出された三つの間について、いくつかの疑問を述べたい。

前に述べた私の研究への入り方からは、実行委員会から提出されたような問題の立てかたは出てこない。

実行委員会の問題のたてかたはこうである。先づ『問題Ⅰ：学問研究に従事するあなたにとっての「現実」とは何か』と問いかける。この「現実」という言葉の意味が一向はっきりしないのであるが、実行委員会によれば、「現実」は、分析的には、「学問研究者としての研究実践の時間と空間、つまり、研究実践の行われる現実と、現在を生きる日本のひとりの市民としての生活実践の時間と空間、つまり、生活実践の行われる現実」とに明らかに区別されるのである。このように研究者を並列的に二面に分割したあとで必死に「現実」は分析的には二つに区別されなくても、主体の統体性に媒介されることによって、主体の内部では、同一であり、統一されているはずである』と弁解する。これは実行委員会

の人々の「学問」が「現実」と乖離していることの告白であると考えられる。だから委行委員会は『第一に、あなたにとっての、学問研究の「現実」は何か、そして市民としての生活の「現実」は何か』と明瞭に「学問」と「現実」の乖離を告白し、『第二に、あなたにとってのこれら二つの「現実」は相互に乖離するかしらないか』『第三に、乖離するとすれば、あなたの主体は、この両者の乖離のうちで、どのようにありえているのか。その乖離は、不可避な所与として是認されるのか。是認されるとすれば、その根拠は何か。他方、この乖離を是認しえないとすれば、その乖離を乖離たらしめない媒介の論理、つまり、第2の現実は何か』と必死になる。実行委員会によれば、自分達は学問をしているという前提から出発している。しかし、学問をしているということは、学問を何んのためにするかという問題を先行的に含むのであり、逆ではないはずである。すなわち学問をする必然性がなければならぬはずである。実行委員会は、この論理的関連をとりちがえたか、あるいは、実行委員会の人々に、はじめからこの必然性がなかったか、のどちらかにより、より本質的な、先行する問題である「あなたの学問研究は、何のため、誰のためになされるのか」ということを問題Ⅱの地位に押し下げたのである。良心的に解釈すれば、乖離をうめるために、必死になっているうちに「何んのために」の問題を考えなければならぬという結論に達したと見ることもできる。いずれにせよ、研究を始めようとする私には、全く理解できない問題のたてかたである。

私の考え方を積極的に展開すれば次のようになる。最初私は、小農民の保守性を、そして、何故に小農でしかありえないかということを明らかにしようという目的をもった。そして現在その研究に従事している。実行委員会の言葉でいえば、生活実践の中で、問題にぶつかり、その問題を解明するために研究実践に移ったということになる。しかし私の存

在は、もともと現実の生活の中にあり、それ以外の所にはありえない。つまり、生活実践と研究実践というふうに分析的にも決して分けられないのであり、私の研究実践は生活実践そのもの、あるいは一部である。すなわち目的からいえば、生活実践の目的のみであり、とりたてて学問の目的というものは存在しない。しいていえば、学問は生活実践の目的に従属する手段であり、学問自体には、窮極の目的は存在しない。すなわち、現実に対処する手段としての学問は、大工における道具——「のみ」や「かんな」に相当し、「のみ」や「かんな」を常に手入れし、といておく努力が要求されるのは、学問についてもまったくあてはまる。しかし、まず、何んのために、この道具を手入れし、とぐかという問題を抜きにしては、誤った手入れのしかたになりかねない。したがって必要なのは、自分が勝手に作ってしまった道具で、あるいは古くなった道具で、現実に

働きかけるのではなく、現実をよく見極め、使える道具と使えない道具を分け、足りなければ、新しい道具を作り出すことである。

少し比喩的になってしまったが、要は、自分の学問と現実との乖離をうめるべく、媒介項を探して自分の学問を正当化することではなく、現実に応じて、自分の学問を変革し、又現実を変革できるような学問を作り出すことではないかと考えられる。したがって自分の研究が、現実に対して、有効性を持つか、どうか、を常に検証できるような形で、研究の筋道を明らかにしておくことが要請されると考えられる。

以上、研究を始めたばかりの、したがって研究者としては何も具体的な仕事を完成させていない者の乱暴な考え方ですので、諸兄の御批判をお願いします。